

ばあちゃんの中

優美ジュン

私はそこに立たずんでいた。薄暗くて息が詰まりそうなその場所に。そつと耳を澄ますと微かに少し甲高い音が聞こえて来る。その音の方に私は振り返ってみた。すると少しづつ見えてくる。柔らかな景色、見覚えのある風景、それは私の記憶の中にある物。坂の上の黄色の点滅の信号、そして車がやつと通れる古くて小さな橋、それから橋の向こうの小さな酒屋と桜の綺麗な公園。私はこの場所で見生まれ育った。二十八年前に家を出るまではここに住んでいた。すつかり懐かしくなり暫く歩いてみる。この辺りはその頃飼っていたビーグル犬を祖母と交代で散歩させていた。そう思いながら歩いていると今でもたまに車で通る大通りに出ていた。だけど何か違っている。それはこの道の先の方に所々あるはずの飲食店等が無くコンビニやマンションも無かった。古い民家がたまにポツンとある位で外灯もたまにあるだけだった。私は何故ここに居るのか何処に行こうとしているのかよく分からない。だけど何故だろう、もつと先へ進みたいと思っていた。

薄明かりの中をまた暫く歩いて行くとそこに一台の古いバスが止まっている。そういえば幼い頃母とよくこんなバスに乗って買い物に出掛けていた。懐かしい気持ちに浸りながら私はこのバスに乗ってみる事にした。そつと中を覗くと運転手さん以外は誰も乗っていない。とても静かで何処からか隙間風が吹いてきている。私は辺りを見回しながらそつと椅子に座った。少し固くてギイーという音が

して座り心地はあまり良くなかった。だけどそれが面白かったのか子供の頃の私は椅子の上でピョンピョン飛び跳ねて遊んでいた。そして隣に座っている母によく叱られていた。あの頃は母も若かった。

* * *

思い出に浸りながら動きだしたバスの窓から何げなく外を見ると、薄明かりの外灯の中に少し古びたアパートが見えている。私はそのアパートをじっと見ていた。すると何だか引き寄せられる感じがしてバスから降りそのアパートの前まで歩き出す。よく見るとここは二十年前に私が勝手に暮らし始めた場所だった。この頃の私はまるで遅すぎる反抗期みたいに両親に反発ばかりしていてその時に交際していた男性と駆け落ちをしてこのアパートで暮らし始める。そして婚姻届も二人で勝手に出しに行き仕事も違う所を見つけて楽しい日々を過ごしていた。所が二ヶ月後その彼は二年前におこした事件が元で服役する事になり、私はたったひとりここに取り残された。始めは戸惑い途方にくれていたがそのまま一人で暮らしながら彼の帰りを待ち続ける。

その一ヶ月後私は妊娠している事に気づいたが別にためらう事もなく、大好きな人の子供を身ご

もった事がただ嬉しくてこの子を産む決心をする。それは彼の両親や親戚の人達の大反対を押し切つての事だった。だけど暫くするとつわりが日に日に酷くなり会社は休みがちになった。それから夜になると吐き気は一段と酷くなり一晩中吐き続ける。それでも残っている僅かな力を絞り出すように朝になれば体を無理に起こして出勤する。そして仕事の合間を見計らつて一日置きに病院で点滴をした。それから何ヶ月かが過ぎお腹も大分大きく目立つてきてつわりもかなり治まり八ヶ月めに入った頃会社の上司にこう言われる。

「産休めあてに入社した人間なんて、うちには要らないから。」

私は妊娠してしまつた事はわざとではなく偶然なのだと言いたかつた。でも言えないまま次の日退社した。

次の日から私はこれから産まれてくる子供と一緒に生きていく為に新しい仕事を探しまわつた。電話で問い合わせたり十件以上の会社で面接を受けたが妊娠八ヶ月だというとすぐどこも断られ、行きついた場所は生活保護の相談だった。でもそこでも中々思いが伝わらず相談員の人はこう言つた。「あなた、ここまでどうやって来ましたか？ 車ですよね。車を持っているんですよ？ じゃあ車を売ってお金を作つて下さい。」

私はとつさに早口で言う。

「今乗っている車は古くていつ止まるか分からないような車です。売れるような物じゃないです。」

するとその人は上目使いでこつちを見ながら、もつと早口で言い出した。

「じゃああなたの両親は健在ですか？ どこに住まれていますか？ どうやって生活されているんですか？ 親が居るならここを頼らず親を頼って下さい。親が持家にお住まいなら家売ってもらえばいいし車を持つているなら車売ってお金を作ってもらって下さい。ここに来ればお金が簡単に貰えるとか思わないで下さい。ここは誰にでもそんなに簡単にお金を渡す所ではありません。皆働いているんですよ。あなただけ働きもせずにお金を貰えるわけじゃないでしょ。」

段々大きな声になりながら段々興奮していくその人に、ただ悔しくてだけ何も言えなかった。涙を精一杯堪えながら大きなお腹を抱えるようにして、逃げるように帰った。もう誰も頼れる人も頼れる所もなかった。

そして二日後の事だった。突然の出血で目が覚める。まさか生理？ そんなわけない。それが何なのか分からず取りあえず病院に電話してみる。いつも冷静な看護師さんが慌てているのが分かった。「とにかく、今すぐ病院に来て。」

そう言われて私は電話を切つてすぐにもより大きめの生理用ナプキンをあててから車に乗り込んだ。だけど車は動かなかつた。何度もエンジンをかけようとしたりけど無駄だった。私は途方にくれないながら部屋に戻る。それからまるで力が抜けたように居間の真ん中に座り込んだ。もう何もできなかった。どれくらい時間が過ぎたのだろうか。出血もまだ止まっていない。すると急に何だか外が騒がしかった。誰かが立て続けに玄関のプザーを押している。だけでももう動けなかつた。声も出せない。すると突然お風呂場のガラスが割れる音がして誰かが近づいて来る。

「こんな所で暮らしていたのか。」

聞き覚えのある声。それは父だった。

「なぜ、ここがわかつたの？」

私が絞り出すような声で言うとうちは少し目を伏せながら言った。

「病院から電話があつた。お前に言いたい事がたくさんあるが今はとにかく病院へ行こう。」

そう言い終わると父は片手を差し出した。久しぶりに見る父の大きな右手だった。私は父の肩を借りやつと歩いて玄関のドアを開ける。すると涙ぐんでいる母が居た。父の車の後部座席に乗り込み、助手席に座っている母の姿をふと見ると何だかひと回り小さく見えて切なかつた。

病院に着くと外で看護師さん達が待っていてくれてあつという間に貸車の付いたベットに乗せられていた。広い病院の廊下を看護師さん達が足早に行き来していても慌ただしかつた。

「急いで。早くしないと間に合わないよ。」

誰かが叫んでいる声が聞こえている。それから病院の天井がぐるぐると回っているようで、私は何だか疲れてそのまま眠ってしまう。目を覚ますと左手に点滴をされているのが見えた。暫くすると看護師さんが来て静かに今の状況を説明してくれた。それによると私は切迫早産をひきおこしていたらしい。だけど何とか陣痛を食い止める事ができたのでお腹の中の赤ちゃんは無事だという事だった。

「あと少しでもこの病院に来るのが遅かつたなら、あなたも赤ちゃんもどうなっていたかわからなかつたのよ。」

急に看護師さんが大きな声で言った。私は事の重大さを身にしみて感じながらお腹の赤ちゃんに何度も心の中で謝り続けた。

それから一ヶ月半の間絶対安静の為此の病院に入院する事になる。そして臨月に入りお腹はまた一段と大きくなりクリスマススイブの日に退院して実家へと戻った。だけど父とはわだかまりがあつてこの時の私の入院費用等は父が支払ってくれたのだが、父との距離は相変わらず縮まる事はなかつた。